

災害情報の読み飛ばし特性 ～避難行動につながる避難文章をめざして～

野々山秀文^{†1}

概要: 人と人のコミュニケーションにおいて、受け手が如何に情報を抽出し、その解釈から行動に繋げるのか、人を言葉で指示した通りに誘導することは難しい。指示に用いた言葉の解釈、指示者への信頼、指示された行動の受け入れなど受け手に関わる問題が多数あるためである。本報告では、2003年宮城県沖地震にて避難指示を受けながらも避難行動に至らなかった住民の調査報告を紹介し、その原因を関連性理論による受け手の注意、ヤコブソンの6機能モデルによる解釈を経て、読解によって表象する状況モデルに注目し、人が災害情報を熟読せずに誤解する読み飛ばしの特性を実験で確認する。最後に、人を避難行動に誘導する避難文章の構築に向けて今後の課題について考察する。

キーワード: 避難指示, 災害情報, 関連性理論, 状況モデル, わかった気, 読み飛ばし

Skip Reading Characteristics in Disaster Information

HIDEFUMI NONOYAMA^{†1}

Abstract: In human communication, the reader is free to parse a written message and to act upon their understanding of the message. Thus it is difficult to guide the reader in the way that the message intended. Factors such as message interpretation, trust level of the message and the reader's willingness to act on the contents of the message are some of the many problems which must be addressed. In this paper, we introduce a report of the 2003 Miyagi Prefecture earthquake where residents did not evacuate even though they received an evacuation order. We experimentally demonstrate the characteristics of skip reading in disaster information by focusing on the situational model generated by reading comprehension according to the reader morals and Jakobson's six functions of language. Finally, we present further research directions for the construction of effective evacuation orders.

1. 避難行動

1.1 事例

2003年5月26日、宮城県沖を震源とするマグニチュード7.0の地震が発生した。岩手県の三陸沿岸では、震度4-6弱が観測され、津波の来襲が懸念された。片田[1]は後に住民調査を行い、住民の避難率は8.1%であったと報告しており、住民が避難しなかった理由として過剰な情報依存がみられ、住民は避難しないことを選択したのではなく避難する選択ができなかったと考察している。一方で住民への避難意向の調査では、町内会役員や近所の人からの避難呼びかけが避難意向の第一位であったと報告している。

自然災害では無い事例として、Jアラートによるミサイル発射の事例[2]を取り上げる。2017年8月と9月の2回にわたり北朝鮮がミサイルを発射し、政府はJアラートによる情報伝達を行った。その際の避難行動の調査報告が同年12月に政府より発表されている。

- Jアラート 2回 (2017年8月29日, 同9月15日)
- 調査対象者 Jアラート発表地区12道県
- 調査 インターネット調査(n=5000)*

政府報告の内、2回目のミサイル発射に関するインターネット調査結果について筆者が注目する点を示す。

- ① ミサイル発射を知っていた 63.4%
- ② ミサイル発射後の行動
 - 避難した 5.6%
 - 時間が無い、避難場所がわからないなどで避難できなかった 43.6%
 - ※ 政府集計の下記項目を合算 (以下同様)
 - 「避難が必要と考えたが、時間がないなどの理由により、避難等できなかった」(17.3%)
 - 「どうしたらよいかかわからず、避難等できなかった」(26.3%)
 - 避難は不必要で避難しなかった 50.8%
- ③ 避難しなかった (できなかった) 理由 (複数回答)
 - 時間がない、避難方法がわからないから 72.7%
 - ※ 「時間がない」(22.3%)
 - 「どこに避難等すればわからない」(32.9%)
 - 「どうしたらいいのかわからない」(17.5%)
 - 必要ないから 65.7%
 - ※ 「自分の地域は関係ない」(19.4%)
 - 「避難など意味がない」(46.3%)
- ④ 避難せずに行った事 (複数回答)
 - TV等で情報収集 69.4%
 - 普段通りの行動 42.6%

^{†1} セコム株式会社 IS 研究所

SECOM CO., LTD., Intelligent Systems Laboratory

* 調査は窓口調査も実施されているが本資料ではインターネット調査結果を用いる。

避難行動を行った住民は 5.6%にとどまり、残りの 90%以上の住民は避難行動を行っていない。また、避難せずに行った行為として第一位に情報収集があげられ、片田の報告と同様に過剰な情報依存の傾向が疑える。なお、避難しなかった理由に関しては若干の注意が必要である。住民は避難しなかった理由を明確に意識できていない場合があり、また事後日数が経過してからのアンケート調査では、理由を失念している場合があるためである。

1.2 住民が求めた情報

住民の避難状況を自然災害と人的災害の 2 件紹介した。筆者は避難行動を起こさずに情報収集する住民が多数いること、避難の誘いが避難のきっかけの第一位に位置付けられていることに着目し、住民は避難の誘いを受けた時に下記に推測する情報を取得したのではないかと、誘いを受けなかった住民は防災無線や TV に欲する情報を求め続けたのではないかと考えた。

住民の心理を推察するに、住民が欲した情報は外界状況と自分の危険度のはずである。具体的には過去の災害の状況、現在の状況に立脚した未来の災害の進展であり、進展の中に自らを置き、身に降りかかる災害の影響を算定することであったはずである。しかしながら防災無線や TV では自分が位置する当地の具体的な情報が得られず、広域情報から推論を行うもののその推論は日常では用いられていないために確証を感じることができず、結果として外界状況と危険度は定まらない。そこに町内会や防災担当が訪問し避難を呼びかけたならば、住民と呼びかけ者との間で質問、回答のコミュニケーションが生じたことが容易に推測され、その結果住民は外界状況と危険度が避難行動に繋がる程度に確証が高まったのではないかと推察する。

本報告では以降、避難指示が発信者と住民との文章によるコミュニケーションと捉え、関連性理論、ヤコブソンの 6 機能モデルを援用して解釈の多様性を論じる。その後、多様性が生まれる原因としてフレーム（後述）の影響を実験で確認し、最後に実験から得られた知見から今後の方向性について言及する。

2. 住民心理の展開

2.1 関連性理論

関連性理論は Sperber & Wilson [3] によって提案された。関連性理論は「関連性の認知原理」と「関連性の伝達原理」からなり、認知原理とは聞き手の認知は関連性を最大にするように働き、関連性は少ない処理労力で多くの認知効果が得られるほど高まるとされている。伝達原理とは話し手の発言は聞き手に関連する内容であると仮定して解釈することで、話し手の伝えたい内容は概ね受け手に伝わるとされている。杉原 [4] は東日本大震災での大津波警報を関連性理論で分析し、警報を受け取った住民の解釈を考察している。本節では杉原の論文から大津波警報の一文を紹介し、

関連性の高まりに応じて受け手が注目する部分が多数存在することを示す。

(A) 【津波予想】

宮城県では 6 メートルの津波が到達すると予想されています。

(B) 【避難呼びかけ】

海岸付近の方は早く安全な高いところに避難してください。

聞き手の解釈は多数存在するが、杉原はその一つとして下記を紹介している。

(A') 【津波予想】の解釈例

アナウンサーは「宮城県では 6m の津波が到達すると気象庁によって予想されている」ことを伝えている。

(B') 【避難呼びかけ】の解釈例

アナウンサーは「海岸付近の人で、放送を聞いている人」に対して、「あなたたちは避難してください」と伝えている。

杉原の解釈(A')(B')には受け手にとって焦点化する箇所が多数見受けられる。例えば宮城県民は「宮城県では」の部分に焦点化することが起き得る。また、海岸にいることを自覚する住民は「避難してください」に焦点化されることがあろう。筆者は、避難指示が発令される緊急時では、送り手が注目する部分と、聞き手が注目する部分のずれが、聞き返しや読み返して修正されずに残されたのではないかと問題視する。

住民と避難を呼びかけた訪問者との間でのコミュニケーションではなぜ欲する情報が得られるのか、筆者は住民が外界状況と危険度を知りたいと欲している状況で(A')(B')の解釈をめぐって発話者の代理として呼びかけ者へ質問が行なわれ、回答を得ることで焦点化する部分のずれが修正され、欲する情報が取得できたのではないかと考えた。ここで注目すべき点は、住民は呼びかけ者が訪問した時にはまだ避難が必要とは考えられておらず、避難しない文脈(状況)で関連性を大きくする部分に焦点化していたと思われることである。コミュニケーションによって住民は焦点化すべき部分を修正し、修正後は避難する文脈での言葉の解釈が行われ、結果として住民の避難が誘発されたと考えた。

次節では避難指示が避難指示者と住民との文章を用いたコミュニケーションであることについて検討を続ける。

2.2 ヤコブソンの 6 機能モデル

シャノン、ウエーバーが提唱した情報伝達モデルは、伝達したい情報は伝文で表現されており、その伝文は送受信機で共有されているコード表で解釈され、意味が伝達されるとされており、本論文が取り扱う文脈に応じた解釈は扱いにくいモデルとなっている。小山はその著書 [5] においてヤコブソンが提唱した 6 機能モデルをコミュニケーションの多機能性を正面から捉えるモデルと考察した。本節では、

小山の解釈を援用して杉原の解釈(A')(B')を考察する。

小山はコミュニケーションには以下の6機能があると考察した。

- ・詩的機能
 韻や命令調を用いることでメッセージが焦点化する機能。杉山の解釈(A')(B')で「避難しろ」などと命令調が使われた場合にはメッセージへの焦点化が促進される。
- ・表出的機能
 メッセージの送り手の心情に焦点をあてる機能。アナウンサーが視聴者を助けたいと思っていると感じさせる機能で、発話者の熱意を感じさせる機能とも解釈できる。
- ・動能的機能
 受け手に求められる行動に焦点をあわせる機能。避難指示が示す避難行動に焦点をあてる機能である。
- ・交話的機能
 送り手と受け手の接触回路に焦点をあてる機能。アナウンサーはTVの視聴者一般ではなく、「私」に語りかけると自分事化させる機能である。
- ・メタ言語的機能
 解釈コードや語用の解釈に焦点をあてる機能。杉山の(A')(B')は複雑な複文であると注目させる機能や、日本語の発言であると意識させる機能である。
- ・言及指示的機能
 言及する指示対象に焦点をあてる機能。津波や時には海岸付近の人を焦点化する機能である。

注目すべき点は、6機能の中で注目される機能が時々異なる点で、送り手は声の抑揚や方言、口調などで強めたい機能を強調したり、文章に於いてはゴシック体を用いたり受動態や直接話法を用いることで注目させたい機能を強化する。平穏時には送り手の採用する用法（語用）は受け手に伝わり、強まる機能は受け手との間で概ね一致し、そ

の結果注目する部分、解釈は概ね一致することになるが、緊急時には、受け手と送り手の焦点はずれるのではないかと筆者は考えた。その原因として送り手は緊急時の用法を用い、受け手は平穏時の避難しない文脈で用法を解釈していたのではないかと、住民が避難しないのは避難指示に反対したのではなく、自身に避難が求められていることが認識できなかったのではないかと推察する。次章では避難することが明記されているにも関わらず避難が求められている事が認識できない状況について考察を進める。

3. 読解プロセス

本節では人の読解プロセスを取り上げ、避難指示への適用を試みる。その後、浅い処理と呼ばれるわかった気になる読解について考察し、避難しない文脈とわかった気の関係について考察する。

3.1 読解プロセス—状況モデルによる心的表象の構築—

文書を読解する時、人は頭の中に何らかの新しい心的表象を作ることが知られている。Kintsch[6]は心的表象には、文章の表層的な構造であるマイクロ構造と、マイクロ構造を圧縮した要約であるテキストベース、およびテキストベースに読み手の既有知識や文章に書かれていない事項を関連づけた状況モデルの3レベルの表象があるとしている。またZwaan[7]は状況モデルは人物性、時間性、空間性、因果性、意図性の5つの次元で構成されると指摘しており、人は文章の読解時には5次元で文章内容を構造化するとされ、イベントインデックスモデルとして形式化されている。図1にイベントインデックスモデルによる状況モデル例を示す。人は読解する文章を5次元のシフト（不連続）を検知することで場面の切り替えを感じ取りシーンの切り替えを行う。筆者はある時点でシーンが切り替わるのは、シフトが起きた次元が読者にとって関連性が高いと認識されている時であり、その際には他の次元が連続中であってもシーンの切り替えが起きるのではないかと考えた。

場面番号	1	2	3	4	5	6	...	N	N+1
人物性	爺・婆さん 【派遣者】	鬼 【敵対者】	桃太郎 【主人公】	イヌ 【助手】	サル 【助手】	キジ 【助手】	桃太郎 【主人公】	桃太郎 【主人公】	爺・婆さん 【派遣者】
空間性	故郷	故郷	故郷	道中1	道中2	道中3	鬼が島	故郷	故郷
時間性	0	- (回想)	0	0	0	0	0	0	0
因果性		【欠如】	【出発】	【獲得】	【獲得】	【獲得】	【闘争】	【帰還】	【回復】
目標性	日常	略奪	鬼退治	きび団子	きび団子	きび団子	勝利	帰宅	日常

状況モデルA	シーン1 日常	シーン2 事件	シーン3 旅路				シーン4 決着	シーン5 勝利
状況モデルB	シーン1 故郷		シーン2 反撃	シーン3 イヌ	シーン4 サル	シーン5 キジ	シーン6 勝利	シーン7 平穏

図1 イベントインデックスモデルによる状況モデル例（桃太郎物語）

図1は同一の桃太郎物語を読解しても読者AとBでは状況モデル（ここでは物語の展開）が異なることを示している。読者Aは場面1と場面2を人物性のシフトで2シーンに分割したが、場面3～6は人物性に注目せずに三匹の家来を獲得する一つのシーン「旅路」としてまとめている。一方読者Bは場面1～2を空間性が連続するシーン「故郷」としてまとめ、場面3～6を「反撃」「イヌ」「サル」「キジ」と四つの連続するシーンとしてイメージしている。場面5に遭遇した際、読者Aは旅路の途中としてシーン旅路を維持し、読者Bはイヌからサルへとシーンを切り替えている。

避難指示が発令される前に、住民はすでにTVなどから災害の状況を手入しており、その時点では避難しない状況モデルが構築されていると思われる。その状況下で避難指示が発令された場合、読者Aのように既築の状況モデル（ここでは避難しない状況モデル）を維持するのではなく、読者Bのように状況モデルに変化をもたらすことが求められる。その為には5次元要素の不連続を読者Aに強く感じさせることが求められる。

3.2 避難情報における状況モデル構築の課題

5次元要素の不連続を認知させる要件に加えて、災害の状況モデル構築には、構成が熟慮され言葉が厳選された書物からの構築とは異なる災害時特有の課題がある。メディアは知り得た出来事（災害の場面）を順不同に報道（特に発災直後は顕著）しており、受け手には知り得た場面を連続するシーンとして繋ぎ合せ整合性のある状況モデルを構築することが求められる。具体的には場面の追加と既存の状況モデルの修正が求められ、読解の負担増が課せられる。図2に既築の状況モデルへの場面の追加、変更の模式図を示す。

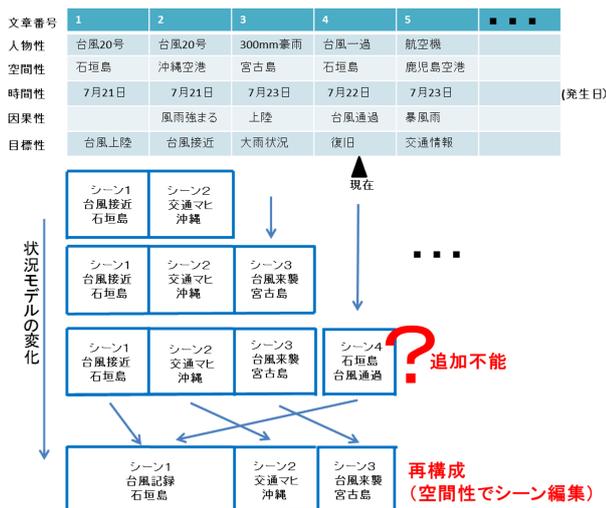


図2 状況モデルの追加、変更

順不同で提供される情報から整合性のある統一した正しい状況モデルを構築するには課題がある。住民は避難しないことを正当化する都合のよい状況モデルをすでに作り上げていることが予想され、その状況モデルでは避難すべき

との避難指示は関連性が弱く注目され難く、時には破棄される可能性があるからである。5次元要素の不連続は必要であるが、それが強調されすぎると破棄されることが起きる。

以上より避難指示には新たに災害の場面を追加する要件に加え、既築の避難しない状況モデルに疑問を生じさせ、状況モデルの再考を促す機能も求められる。明記されているにも関わらず避難指示が認識されない理由が関連性の低い避難指示となっていることが疑われる。今後詳細な検討が求められよう。

3.3 浅い処理によるわかった気

避難しない状況モデルを避難する状況モデルに変更することが困難な理由として浅い処理に着目する。福田[8]は自身の論文の中で浅い処理と呼ぶ厳密でない処理を紹介し、人はその時の目的にかなった「ほぼよい表象」を作っていると考察した。日常では避難しない表象はほぼ良い表象である。緊急時には避難する表象がほぼ良い表象である。緊急時でありながらも日常として避難しない表象がほぼ良い表象であると住民は見做しているのではないかと筆者は推測した。ここで避難指示に対して仮説を生起する。すなわち、人は災害情報の理解において、自分にとって都合のよい理解を求め、災害の事実を理解していないにもかかわらず災害状況が「わかった気」になっており、わかった気が避難しない状況モデルの維持に繋がっているのではないかと仮説である。

本節の論点をまとめる。書物の読解では、文章の展開に従って語られる場面に関連性を高め、状況モデルを構築する事でほぼ良い表象を得ることができる。またわかった気による誤った状況モデルが生じてても、場面の繋がりに関連性の低下を感じ状況モデルの修正が必要であると気づくことができる。しかし災害時の文章では、順不同の場面に自身にとって都合のよい繋がりを設定しわかった気になっているため関連性の低下を明確に気づくことができず、結果として状況モデルの修正が行われず、避難しない状況モデルが維持されてしまうのではないかと筆者は考察する。

4. 実験 わかった気 ～部分の読み飛ばし～

4.1 わかった気による読み飛ばし

避難しない状況モデルの維持が、わかった気によるならば、わかった気の発生を防止する必要がある。読者がわかったと思う条件を西林[9]は考察し、文章の理解に矛盾をきたさない統一的な状況が見出せれば読者はわかったと感じている。西林はまた、文章の部分（セグメント）から限られた意味しか引き出されていない現象について考察し、そのセグメントが注意を引き付けていないからではなく、読み手がその時に使用するフレームの影響であると指摘した。フレームとは想定された統一的な状況で、人はフレームから部分に書かれていることを予想し、更に冗長である

と感じた場合には「ああ、あれだな」と読み飛ばしが生じると論じている。

筆者は緊急時の切迫した状況が部分の読み飛ばしを誘発し、避難しなくてよいとのわかった気が、ほぼよい表象として継続されるのではないかと考えた。

4.2 実験

災害を伝える文章を用いて、読み飛ばしの状況を調べる実験を行った。西林の実験に倣い矛盾のある文章と整合のとれた文章の2種類を用意し、読解後に逐語的再生テスト、選択肢再認テストを行って文章の読み飛ばしとわかった気との関係を調べた。

●課題文

図3に示す2種類の課題文（矛盾文章、整合文章）を作成した。

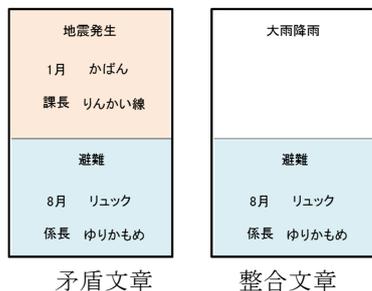


図3 実験試料

課題文はサラリーマンが自宅を出て外出先で被災し避難行動を行う物語となっている。矛盾文章は前半で地震に遭遇し、後半では避難行動を行う文章となっている。一方、整合文章は前半で大雨に遭遇し、後半では矛盾文章と同じ避難行動を行う文章となっている。矛盾文章では前半と後半で図に示す4要素に齟齬がある文章となっている。整合文章の前半には4要素の記述はなく、後半との一貫性はたもたれている。

矛盾文章の読解者は、前半でフレームが設定され、そのフレームで後半を読み進むため、後半に記述される4要素をわかった気で読み飛ばし、齟齬に気が付かない可能性がある。その現象を逐語的再生テストと選択肢再認テストで計測する。

●被検者と実験手順

- ・被検者 21名 (20~50代 男性20, 女性1名)
- ・手順概略

被検者21名を2グループに分け、一方が矛盾文章をもう一方が整合文章を制限時間で読解し、後に逐語的再生テストと選択肢再認テストを実施した。

逐語的再生テストでは災害文章に書かれている用語を列挙することで文章のあらすじを再生することを求めた。

選択肢再認テストでは災害文章の後半に記述された4要素を三者択一から選ぶことを求めた。「8月、リュック、係長、ゆりかもめ」が正答である。

- ・なお実験前には実験の説明は行っていない。

●結果と考察

表1に再生テストおよび再認テスト結果を示す。紙面の都合、人物および時期に限った結果を示す。

①逐語的再生テスト結果

矛盾グループは人物に関する記述では課長（前半）を記述する傾向（11人中5人）があり、整合グループは係長（後半）を記述する傾向（10人中7人）がある。

時期に関しては、矛盾グループ、整合グループともに記述しない傾向（11人中6人、10人中7人）があり、記述した際には後半の8月を全員が記述している。

持ち物、路線に関しても時期と同様の結果となっている。

表1 再生・再認テスト結果（人物、時期）

	新宿で別れた人の記述			時期の記述			前半記述	後半記述
	課長	係長	なし	1月	8月	なし	合計	
矛盾グループ	5	2	4	0	5	6	11	
整合グループ	2	7	1	0	3	7	10	
合計	7	9	5	0	8	13	21	

②選択肢再認テスト結果

	新宿で別れた人は？			いつの出来事ですか？			合計
	課長	係長	なし	1月	8月	なし	
矛盾グループ	8	3	0	0	9	2	11
整合グループ	2	7	1	0	5	5	10
合計	10	10	1	0	14	7	21

③再生テストと再認テストの比較結果

再生テスト結果と再認テスト結果を比較する。

人物に関する回答では、矛盾グループが再生テストでは（課長、係長、なし）= (5,2,4)、再認テストでは（8,3,0）との結果となった。再生テストで人物を記述しなかった4人は再認テストでは課長（3人）、係長（1人）を選択し、再認テストでの自由筆記では人物に関して記述せず、再認テストの三択形式では4人中3人が前半の課長を選択した。整合グループでは再生テスト、再認テストとも人物に関しては(2,7,1)で、正解である係長（後半）が概ね記述、選択されている。以上の結果より、人物に関しては前半のフレームの影響で後半の係長が読み飛ばされたことが示唆された。

時期に関しては、矛盾グループは再生テスト（1月、8月、なし）= (0,5,6) が、再認テストでは (0,9,2) となり、再生テストでは時期を記述しなかった6人の内4人全員が再認テストでは8月（後半）を選択している。整合グループでも同様の傾向が見られ、時期の記述が無かった7人中2人が8月を選択している。以上の結果より、時期に関しては、後半での読み飛ばしは発生していないと考えられる。

持ち物に関しては人物に関する回答より程度は低いものの、後半の読み飛ばし傾向がみられた。

路線に関しては、自由記述の再生テストには記述がなく、三択による再認テストでは回答が別れたことより、被検者にとって興味が低い要素であった可能性が示唆された。

4.3 まとめ

実験より、前半でフレームが設定され、そのフレームで後半が読解され、4要素に対してわかった気による読み飛ばしが観測された。前半で構築されたフレームを既築の避難しない状況モデルとし、後半を順不同に報道される災害場面と読み替えると、避難しない状況モデルで災害場面は読解され、読み飛ばしによるわかった気によって避難しない状況モデルが維持される可能性が示唆された。また4要素の内人物に読み飛ばしが強く表れたことより、5次元内の人物性にわかった気が強く維持される可能性が示唆された。

なお、課題文の違いによる回答への差異は無いとの帰無仮説をたて、 χ^2 検定（有意水準5%）を行った。検定の結果、逐語的再生テストでは4要素全てにおいて帰無仮説は肯定された。選択肢再認テストでは3要素（人物、持ち物、路線）で棄却された。両テストで検定結果が別れた理由として、課題文は筆者が作成した物語文であり、読み飛ばしを計測した4要素が三者択一で返答を求められなければ物語の展開において重要視されない単語であったとの可能性が疑われる。更に被検者数に対して4単語に対する重要性の個人差が大きく影響したとも推察される。齟齬のある単語の精査と被検者数を増やしての追加実験が求められる。

5. 総括

実験を通してわかった気による読み飛ばしを確認した。わかった気によって読み飛ばしが発生し、新しい情報の入手が阻害された結果、現状の避難しない状況モデルが維持される。更に避難しない状況モデルが維持されたことにより避難が必要ではないとのわかった気が強化される可能性が懸念される。

本報告の総括として、読み飛ばしとわかった気を抑制する避難指示のあり方について考察する。筆者はある程度のわかった気を前提とした避難指示を検討することが現実的と考えており、わかった気から読み飛ばしが生じた時点で文章の一貫性が阻害され、自らのわかった気に疑問を生じさせる文章構造を提案する。具体的には文章を構成する部

分ごとに標題を設定した文章構造が考えられる。谷口[10]は自身の論文でオーガナイザー、特に文章に先立ち与えられる先行オーガナイザーの効用について論じており、筆者は先行オーガナイザーがわかった気に気づきを与え、再読（読み飛ばしの回避）を促し、結果として避難しない状況モデルへの疑問から避難する状況モデルの再構築に繋がる可能性があると考えられる。また実験の結果から先行オーガナイザーには人物に対するわかった気を意識させる用語が効果的と思われることも判明した。なお、オーガナイザーを設定する粒度に注意が必要であることを付言する。今回の実験は単語の読み飛ばしに着目したが、読み飛ばしは単語単位で起こるとは限らず、行、段落、ページなどでの読み飛ばしが想定できる。避難指示には、災害の種類や状況によって緊急の避難呼びかけや、比較的余裕のある避難呼びかけがある。読解に費やすことができる時間に応じて読み飛ばしの文章量は変化すると思われる、読解時間と読み飛ばす文章量の関係を把握した後、読み飛ばしが想定される単位でオーガナイザーを設定することが必要と考えられる。

最後に、今後は自身を災害の状況モデルに定置し、自身の危険度を判定するプロセスを明確にすることで求めている。危険度の判定プロセスを検討することで避難指示が備える要件が精査され、避難行動を誘発する避難指示へとつながることを期待したい。

参考文献

- [1] 片田敏孝. 避難できない住民の心理を検証する. ほのお, 2006, vol.11, p.4-13.
- [2] “北朝鮮によるミサイル発射事案に関する住民の意識・行動等についての調査【詳細】”. http://www.kokuminhogo.go.jp/pdf/20171213survey_details.pdf, (参照 2017-12-20).
- [3] Sperber, Dan and Wilson, Deirdre. Relevance: Communication and Cognition 2nd edition. Blackwell, 1995. スペルベル, ウィルソン. 関連性理論-伝達と認知- 第2版. 内田聖二, 宋南先, 中達俊明, 田中圭子 訳, 研究社, 2000.
- [4] 杉原満. 津波避難呼びかけ表現の課題～関連性理論を中心とした分析～. 放送研究と調査, 2012, May, p.28-45.
- [5] 小山亘. コミュニケーション論のまなざし. 三元社, 2012.
- [6] van Dike, T.A., and Kintsch, W.. Strategies of Discourse Comprehension. San Diego, CA:Academic Press, 1983.
- [7] Zwaan, R.A., and Radvansky, G.A.. Situation Models in Language Comprehension and Memory. Psychological Bulletin, 1998, vol.123, no.2, p.162-185.
- [8] 福田由紀. 私たちは文章を正確にとことん読んでいるだろうか?—文章理解モデルに関する浅い処理の視点—. 法政大学文学部紀要, 2008, vol.58, p.75-86.
- [9] 西林克彦. フレームの存在による読み飛ばしとフレームの変更による読みの促進. 宮城教育大学紀要, 1994, vol.29, no.2, p.197-209.
- [10] 谷口篤. 文章の保持におけるオーガナイザの役割. 教育心理学研究, 1983, vol.31, no.4, p.326-331.